

## 戦略・戦術的思考とは何か

家村和幸

「戦争の勝敗は腕力の強弱であり、正義とは関係ない」これは、かの有名なパール判事のお言葉です。パール判事は日本が好きであるとか、日本鼻根であるとか、そのようなことで日本人被告全員の無罪を主張したのではありません。まさにこの国際社会の冷厳な法則に従って、全員を無罪と判定したのです。まず、このことをしっかりご認識下さい。本日は10分間という限られた時間ですが、「戦略・戦術的にものごとを考える（以下「戦略・戦術的思考」とする。）」と言うこと、そして「なぜ我々日本人はこのような戦略・戦術的思考が苦手なのか」という2点についてごく簡単に説明したいと思います。

なお、戦略・戦術的思考について、更に詳しく知りたい方は、別冊宝島「真実の日本戦史」を是非お読みいただくことをお勧めします。

さて、本題である「戦略・戦術的思考」ということを理解する大前提として、「人間とは「戦う」存在である」ということを申し述べておきます。弱肉強食、優勝劣敗の自然の摂理の中で、人間は叡智を絞って戦いに勝ち、生存を維持し続けてきました。この戦いの究極の目的は、敵に我が「意思」を強要することです。戦いの手段と程度は様々ですが、戦いとは、全て不確実・不明瞭な条件の下における、自由意思を有する敵との抗争であり、いわゆる「武力戦」とは戦いの一部なのであり、全てではありません。

意思とは「目的（何のため）」「目標（何をやる）」の形で現れます。目的は固定的で不変なもの、目標は目的を達成できる範囲内で流動的かつ可変なものです。そして、双方に戦う「意思」が存在するとき、「戦い」が生起し、双方に戦う「意思」が存在する限り、「戦い」は継続されます。そして、一方が戦う意思を喪失したとき、「戦い」は終結し、「勝・敗」が確定します。

次に、我々が日常的に用いる「戦略」「戦術」あるいは「戦法」というものについて、簡単に定義しますと、それらは「戦い」の「策略」「術策」「方法」であり、その違いは、最も端的に言えば「主体のレベル（国家～総軍～各級部隊～各兵士・各武器）」です。そして、「戦略」「戦術」「戦法」は、「我」のレベルに応じて「相似形」をなすものなのです。共通して言えることは、これら戦略・戦術・戦法は、「実行」を伴うことが大前提であり、空理空論では意味をなさない、ということです。

一般的には、「戦略」とは、敵に勝つための大局的、総合的な方策や策略であり、戦術レベルの行動に目的と方向性を与え、作戦単位部隊の基礎配置を決定するもの、と定義され

ます。主体のレベルに応じて「国家戦略」「軍事戦略」「作戦戦略」といったものがありますが、個々では詳しい説明は省略させていただきます。

「戦術」とは、個別の作戦・戦闘において、状況に即して任務達成に最も有利なように、主として師団レベル以下の戦闘力を直接敵部隊に加える術策であり、「作戦・戦闘を実行する術」つまり、戦略上の決定に基づき、決定された空間と時間の範囲内において採用する一時的な手段です。

「戦法」とは、戦闘の各局面で効果的に敵を破砕し、より多くの損害を与えよう、戦略上・戦術上の決定を受けて創出された具体的な実行方法です。

こうした、「戦略」「戦術」「戦法」を考察するための考慮用件が、いわゆる「戦いの4要素」といわれるもので、それは、「我」「敵」「時間」「空間」です。つまり、「戦い」とは、与えられた時間と空間の中で、常に“敵を意識し、我が適時適切に対処する”状態なのです。

さて、それでは本題の一つ「戦略・戦術的思考とは何か」ということについてです。

「戦略・戦術的思考」とは、時々刻々と変化する環境の中で、次に述べる5つの思考過程を繰り返し、継続して行うことです。

まず第1段階として、「我」の「目的」（何のために）を明確化します。クラウゼウッツの言葉に「目的を手段に適合させよ、目的を常に銘記せよ。」というものがありますが、「目的」すなわち「何のために」を忘れて、あるいはそこから離れて行動してしまうことを我々は「無目的な行動」と呼びます。

第2段階として、「我」と「敵」の白紙的能力及び「時間」・「空間」的枠組みをしっかりと把握します。しかも、これを継続的に把握して、その変化を敏感に察知しなければなりません。

第3段階として、「我」の「目標」（何をどうする）を確立し、「方策」（いかにして）を案出します。この段階で方策は一つの場合もあれば、複数のオプションとして列挙される場合もありますが、いずれにせよ、事後の計画及び部隊の配置が状況に適合するように、柔軟性を確保していなければなりません。

第4段階として、「敵」の「企図」（目的、目標）及び「方策」（いかにして）を推察します。このため、敵に関する情報を継続的に収集するとともに、敵指揮官の立場に立って考察することが重要です。そうでないと、「我に都合のよい敵」ばかりを考察してしまいがちです。ここに、優れた洞察力が求められます。

第5段階として、今まで述べた第1から第5段階をもとに、「我」「敵」「空間」「時間」を総合的に判断し、最良の「方策」（いかにして）を決定します。この際、空間的・時間的枠組みの中で我と敵との取りうる行動を組み合わせて「戦い」の様相をシミュレートし、問題があればそれに対する適切な対策を考えつつ、より積極的に目標を達成しうる方策を確立してゆきます。

以上、「戦略的・戦術的思考」について極めて簡単にまとめて申し述べましたので、次にもう一つの主題である「なぜ我々日本人はこのような戦略・戦術的思考が苦手なのか」ということについて、私なりの考えを述べさせていただきます。

まず、その大前提として、私は「日本人とは、世界中で最も戦う意思が希薄な民族だ」と常々考えております。「戦う」ことよりも、「和を以て貴しとなす」の精神を尊重することから自然のうちに、あえて敵意を持たない、集団の中では1人だけ逆らわない、と行った考えを重視することとなり、結果として「敵」を正しく捉えることが出来ない、あるいは正々堂々と相手に自己を主張できないといった人間を数多く生みだしてきたのではないのでしょうか。私なりの軍人経験からも日本人は「敵を常に意識して行動する」ことが苦手であると何度も感じたことがあります。

私達日本人が目指すべき社会とは、『強く正しい「和」の社会』です。これは、内には人格・識見に優れた「無私のリーダー」が存在し、外には「敵」を正しく捉えながらも、敵意を持たず、しかも卑屈にならず、といった自主独立の精神が発揮されていることが絶対条件です。聖徳太子の優れた内政と外交、つまり遣隋使の国書「日出ずる国の天子」と十七条の憲法こそは、この強く正しい「和」の社会の代表例と言えます。

これに対して、弱者の逃げ道としての「和」というものがあります。優れたリーダーを欠く社会においてよく見られる、波風を立てないだけの見せかけの「和」とでも言いましょうか。ここでは、「信念に根ざした異論」は封じられます。いわゆる「村八分」というものです。「和を乱す」の発想が全ての主張を抑制し、皆が「和」を装った「譲歩」「屈服」に陥っている社会です。こうした社会の中で過ごすことによる過度の自己抑制が、やがて人々の「戦う勇気」「戦う意思」そのものを希薄化させてしまいます。その結果、どんな相手とも、ひたすら衝突を避け、全てを「話し合い」で解決しようとする事となり、やがては、原則なしにひたすら譲ることにつながっていきます。

日本人の民族性とは、勤勉、正直、誠実、寛容、団結強固、礼儀、規律心・道徳心などであり、これらは過去の歴史においても欧米人や支那人が絶賛してきたものです。こうした民族性を受け、歴史的に見ても日本兵の強さは世界随一であり、その戦術には優れたものが多かったのですが、なぜか戦略面では稚拙なものが極めて多いのも事実です。つまり目先の戦いには勇猛果敢に挑む日本人ですが、戦術・戦略的にものごとを考えることには

あまり習熟していないということです。その理由については、次のようなことが考えられるのではないのでしょうか。

まず、日本人が単一民族であり、比較的平等な社会を構成してきたということです。古代ローマや近世の欧米諸国が行ってきた奴隷制、インドのカースト制度やフランス革命に見られる階級闘争は、日本には起こる余地がなかったということです。

第2に、日本は四面環海の恵まれた地理的条件から、他民族による侵略をほとんど経験してこなかったということです。ましてや他民族に支配され、迫害され、抑圧され、虐げられた民族共有の体験を全く持たないため、日本人には「怨」を持たない民族的なDNAがあるとと言ってもよいでしょう。ただし、科学技術の発達により戦争の形態そのものが大きく変わりつつある今日、「四面環海」はもはや絶対の防壁ではなくなりつつあるということをお忘れではありません。

第3に日本人が農耕民族であり、定められたことを、コツコツときちんとやり続ける民族であったということです。二宮尊徳先生の有名な句「この秋は雨か嵐かしらねども 今日のとめの田草とるなり」、これこそが日本人の典型的な思考形態です。全ては自然のなせるまま、自然との共存で生きてきた日本人の思考形態は「状況対処型の思考」といえます。これに対して、狩猟民族は、「状況作為型の思考」なのです。

第4に、我が国の歴史の大半は、「兵馬の権」つまり軍事というものを一握りの武士階層が独占してきたため、他の階層は軍事に無縁な世界であった、ということです。この武士階層は、「孫子兵法」や「支那哲学」を日本的に解釈し、忠実に実行してきましたが、その理解の仕方は極めて日本的であったといえます。

「戦略的・戦術的思考」とはどのようなものか、そして、我々日本人が「戦略・戦術的思考が苦手」である理由が御理解いただけただけでしょうか。

それでは、なぜ今、私がこの様なことを強調して皆様に訴えたいのか。それは、現代、そして将来の戦争様相がますます複雑・巧妙化し、「我々は戦略・戦術的思考が苦手なのだ」などと言っていない時代が既に到来していると認識しているからです。

「科学技術」の発展は戦争形態を変え、それに伴い軍事思想を変えてきました。小銃、機関銃、戦車、航空機、潜水艦、ミサイル、核兵器、軍事衛星などの登場は、「戦場空間の拡大」と「時間の短縮」をもたらしましたが、特にIT化による情報化社会の到来は地球規模での行動を瞬時に、かつ同時に生起させうる可能性をもたらしました。しかも、情報化社会における戦争で勝利を得る最良の方法はコントロールであり、殺傷ではありません。

現在、どこの国でも、これらに応じた戦略・戦術思想の変革が求められています。

これからの戦争は、武力と非武力、軍事と非軍事、殺傷と非殺傷を含む全ての手段で敵を強制して我の利益を満たす戦争となり、あらゆる戦士に「精神的な強さ」が求められます。もはや平時と有事、前線と銃後の垣根は消失しつつあり、軍人も非軍人も皆が「戦士」としての「強さ」が求められる時代なのです。

国家・個人の究極目的は「生存」と「繁栄」です。そして、「自由な精神の活動」が生存の大前提であり、これが失われれば、たとえ生存していても個人は「奴隷」と化し、国家は「生ける屍」の集合体と化します。

軍事とは国家としての生存本能そのものであり、今や政治、外交、経済その他あらゆるものに軍事的価値判断が求められる時代です。祖国日本をより良い国家、よりよい社会として子孫に遺していくため、今を生きる我々は日本人としての美徳を尊重し、大切にしつつも、これを「弱点」にしないことが重要です。美徳だけでは生きていけない時代である一方で、日本人らしさ、日本精神が求められる時代です。まさに、日本人としてのアイデンティティと戦略・戦術的思考が求められる時代と言っても過言ではありません。

私は、一人でも多くの日本人が強く正しく勇猛果敢な先人たちの偉業を学びながら、戦略・戦術的な思考を身につけられるように、私なりに貢献できることを模索し、今回宝島社から「真実の日本戦史」という本を出すことが出来ました。これからも、何か出来ることが有れば躊躇することなく実行していこうと考えています。

とりとめもない話となりましたが、以上で私の発表を終わります。  
ご静聴ありがとうございました。

(平成 19 年 11 月 4 日 二宮報徳会『意見発表の会』口述原稿)